

French-Japanese workshop at IFSTTAR 参加報告書

静岡理工科大学情報学部

紀ノ定保礼

1. 本出張の目的

本出張の目的は、以下の三点であった。第一に、道路横断時の行動や意思決定に関して多くの研究を行ってきた Dr. Cavallo 及び共同研究者に対して、出張者がこれまで行ってきた関連研究を紹介し、示唆を得ることであった。第二に、交通研究に関して世界を牽引する IFSTTAR 研究所が有する実験設備を見学し、共同研究の可能性を模索することであった。第三に、IFSTTAR 研究所や他機関の研究者が行っている最新の研究を聴講し、研究のトレンドを把握することであった。

2. 出張中の活動

本出張では、9月13日、14日にかけて、IFSTTAR 研究所において日仏の研究者が研究発表を行い、最新の知見を紹介しあった。出張者は、大学院在学時に行った一連の道路横断研究 (Kinosada & Usui, 2016, Japanese Psychological Research) を紹介した。本研究の概要を以下に記す。

道路横断時の判断に関して、これまで多くの研究が行われてきたが、主に横断者が環境から獲得するボトムアップの情報の影響に注目が集まっていた。例えば Dr. Cavallo の研究グループは、高齢者は若年者に比べて、道路横断時に接近車両までの距離に依存した意思決定を行う傾向が強いことを解明している (e.g., Lobjois & Cavallo, 2007)。一方で本研究では、接近車両の行動に対する横断者の予測という、これまで看過されてきたトップダウン情報処理の観点に着目した実験を行った。その結果、横断者は自身の物理的な脆弱性 (事故発生時における被害の大きさ) を手掛かりに、接近車両の減速を予測している可能性が示された。本発表に対してフロアから様々なコメントや指摘を頂き、議論を行った。

また、他の参加者がそれぞれの研究や現在の構想を発表し、意見交換を行った。交通心理学の伝統的な研究テーマから、認知心理学や社会心理学をベースとした研究まで多岐に及び、多角的に交通安全の問題に取り組んでいることがうかがえた。

さらに、ほぼ全視野をカバーしたドライビングシミュレータ及び歩行者用シミュレータを見学した。これらは同一の設備であり、用途に応じて使い分けられている。また、空間ナビゲーションに関する研究もおこなわれており、簡易の歩行者用シミュレータを使った経路案内研究も紹介を受けた。

3. 出張の成果

本出張では、当初希望していた三点の目的が達成され、非常に有用な体験を得ることができた。出張者と同じく道路横断行動の研究を行っている研究者と交流できたことで、今後どのような研究が必要か、深く意見交換することができた。また、自動運転車両の出現など、工学的技術の進歩による交通環境の変化の影響についても、様々な観点から研究の可能性を模索することができた。

今回の研究発表を通じ、出張者の研究に関心を持って頂いた実感を得た。今後も継続的に交流を続け、日仏の共同研究が実現するよう、精進していきたい。

最後に、このような機会を与えてくださった学会に、心より御礼申し上げます。